

(課程博士)

## 論文要旨

|       |          |             |          |
|-------|----------|-------------|----------|
| 所 属：  | 総合生活 研究科 | 総合生活 専攻     | 博士後期 課程  |
| 学籍番号： | 2142201  | 申請学位（専攻分野）： | 博士（ 学術 ） |
| 学生氏名： | 稲村奈緒子    | 指導教員名：      | 金子健彦     |

|      |                         |
|------|-------------------------|
| 論文題目 | 中高齢者を対象とした歌唱が口腔機能に及ぼす影響 |
|------|-------------------------|

### 概要

超高齢社会に突入した日本では、健康寿命の延伸が重要な課題であり、口腔機能の低下が全身の健康に与える影響が注目されている。特に、オーラルフレイル（口腔機能低下症）の予防が、フレイルや要介護状態を未然に防ぐための重要な鍵のひとつと考えられる。第1章では、研究の緒言としてその目的と意義を述べた。第2章では、32名の男女（平均年齢69.0歳）を対象として、歌唱習慣を有することとオーラルフレイルスクリーニング指数との関連性の検証を自記式質問紙により行った。結果、歌唱習慣を有することは、有意にオーラルフレイルスクリーニング指数を低下させた。第3章では、31名の男女（平均年齢73.3歳）歌唱前後の口腔機能指標の変化を、最大舌圧、口腔内水分量、自律神経バランス（LF/HF比）などの指標を用いて、単回の歌唱指が口腔機能に与える即時的な影響を検証した。その結果、1回20分程度の歌唱指導後に最大舌圧が有意に増加することが明らかとなった。さらに男女を比較すると男性では、有意に強く増強された。一方で、口腔内水分量の平均値は増加し、LF/HF比は低下したが、統計学的に有意ではなかった。第4章では、全国規模のウェブ調査を外部組織に実施を委託した。対象は20歳代から80歳代の一般成人700名であり、各年代の男女数は50名とした。質問項目は、オーラルフレイルの認知度と理解度に関する設問、歌唱の頻度やその習慣に関する設問、オーラルフレイルスクリーニング指数、抑うつ程度、残存歯の数、口腔健康リテラシー評価に関する設問である。属性として、最終学歴と世帯年収につき検証した。結果、「非常に低い」オーラルフレイルの認識レベルを持つ回答者（64.6%）と、「低い」認識レベルを持つ回答者（18.9%）が全回答者の大多数（83.5%）を占めていた。オーラルフレイルに関する情報源としては、テレビなどのメディアやインターネットが主であり、医師や歯科など医療機関からの情報提供は限定的であった。重回帰分析を行ったところ、年齢が高いほど、口腔健康リテラシー評価が低いほど、残存歯数が少ないほど、オーラルフレイルスクリーニング指数は有意に高く、その危険性が示唆された。世帯年収が高く、教育レベル（最終学歴）が高いほど、オーラルフレイルスクリーニング指数は有意に低値であった。なお、月あたりの歌唱習慣が120分以下である非習慣的歌唱者と121分以上である習慣的歌唱者の間で、オーラルフレイルスクリーニング指数の平均値に $\chi^2$ 乗検定にて統計的に有意な差は見られなかった。また、「歌唱頻度スコア」とオーラルフレイルスクリーニング指数との間の関連は、線形回帰分析においてもスピ

(課程博士)

アマンの順位相関係数を用いた分析においても有意ではなかった。一方、オーラルフレイルフレイルスクリーニング指数と抑うつ症状スコアとの間には有意な関連があった。本章では、歌唱習慣とオーラルフレイル予防との間には統計的に有意な関連は認められなかった。この要因として、回答者全体の 57.7%が「歌唱習慣がない」と回答したことなど、いくつかの負の要因が影響したと考えられた。第 5 章では総合考察を行い、第 6 章で総括した。本研究では、第 2 章で歌唱習慣を有することがオーラルフレイルスクリーニング指数を有意に低下させることを示し、また第 3 章では最大舌圧が単回の歌唱指導後に有意に上昇することを示したが、口腔機能の他の評価項目の検証や、複数回の歌唱指導後の経時的変化、対象者数を増やした検証については今後の課題である。また、全国ウェブ調査では、オーラルフレイルの認知度が低いことが明らかとなった。本研究の結果は、地域社会における健康増進活動や公衆衛生プログラムの設計において新たな知見を提供するものである。